

令和2年度 いいきいき☆町わくわく滝上町子育てセミナー

滝上版『こどものこころを理解する』vol.3 (青年期以降編)

こどものこころ相談室がじゅまる 臨床心理士 寺崎 真一郎

さていよいよ、この子育てシリーズも最後になりました。乳幼児編、思春期編を読んでもくださった方々、本当にありがとうございます。

今回は青年期のことを取り上げてお話ししたいと思います。

特に今回は、皆さんが関心のある『社会に出られない若者たち』について、少しお話をしていきたいと思います。

実は筆者も若い時に引きこもり支援の仕事をしていたことがあります。

当時は親の会が無数にあり、引きこもりになったお子さん(20歳以降の大人もかなりいました)をもった親御さんたちが参加されていました。

私はご家族から依頼を受けて、夜中の2時とか3時にお宅に訪問して本人と話をし、本人と家族の間をつなぎ、一定期間本人をお預かりするという仕事をしていました。

もちろん穏便に行かないことがほとんどなので(笑)、紙面には載せられないほど大変苦労した記憶があります。お預かりすると言っても、寮のようなところで、毎日決まった時間に起きて、農作業をし、何時間も話をするという治療的なものでした。

そこで見えてきたものは『他人からの評価への過敏さ』、『自信のなさ』、『本心を隠して付き合ってきた人間関係』、『親に対して非常に依存的』ということが当事者(本人たち)が抱えている共通のテーマとしてあるように感じられました。

Q. どうして引きこもるのか？

.....
ではなぜ、このような現象が起きて来たのかと皆さんは疑問に思われるのではないのでしょうか？

「発達障害が見過ごされてきた結果の二次障害だ!」という専門家の方もいるかもしれませんが、私も否定するつもりもありませんが、興味深いことに*諏訪(2006)は、「一次性的なものとしての引きこもりが非常に増えている」と述べています。

どうやら何らかの障がいや疾患がないにもかかわらず、急に引きこもりのような状態になってしまうことが起きているようなのです。

ですから、今回はこのような視点で引きこもることについて考えていきたいと思います。



イギリスの小児科医でもあった、D.W.ウィニコットによると、「こどもは万能的な世界（なんでも思い通りになると感じている世界）から、次第に周囲の環境と折り合える（思い通りになることもあるし、そうではないこともある）ように発達する」と言われています。

ここでのポイントは、乳幼児期における「万能感」を大人（周囲）が十分に支えていること、そしてその万能感に浸る世界から「環境との折り合い」に至るプロセス（過程）を大人（周囲）が適度に抱えてあげられていたかどうか、ということです。

このことは、植物を育てるのと非常に似ているところがあって、発芽するまでには非常に繊細に、こちら側も細心の注意を払いながら、水をたっぷりあげますが、しっかりと根を張れるようになると水やりは控えめにしながら成長を見守ります。

私は心理士になる前に、本気で農業で食べて行こうと思って、「伝説」と呼ばれた農家さんに教を乞いに行っていました。その頃からトマトの栽培をしています、教えられたのはトマトと対話をしながら育てて行くということです。

実はこの対話をする力がうまく働いていないということが子育てでも起きていると思うのです。

どういうことかと言うと、根が張っているのに水をあげ続けて根を腐らせてしまったり、まだ根を張れていない段階で水やりを止めてしまったりということがしばしば起きているように思うのです。

ここで少し、事例をご紹介します。

これはある20代の青年の話です。彼は長男で、幼少期から非常に優秀なお子さんだったそうです。初孫だったこともあり、周囲からも大切に育てられました。

当時の記録を見ると、彼自身、おそらく知的能力は非常に高いものがありました。

父は仕事が忙しく、家にはほとんどいなかったそうです。父親自身が大学進学を諦めて就職したこともあって、両親の期待は非常に高いものがありました。

本人も高校までは順風満帆で、周囲からもちやほやされることも多かったのですが、大学進学を失敗します。そしてそこから数年間引きこもることになりました。

大学へ進んで欲しいという両親の焦り、何かうまくいかない、誰にも自分の苦しみを理解してもらえない気持ちは、次第に家庭内暴力へと発展しました。

両親は「いつか本人も社会に出るだろう」という楽観的な気持ちと、たまたま出会った引きこもりの本に「見守ること」が書かれていたこともあって、本人の思うように生活をさせていました。家庭内暴力が起きないように“腫れ物に触るような”感じもあったそうです。幸い、息子一人くらいは養える状態だったので、引きこもる生活は数年続きました。



このことを皆さんはどのように考えますか？

愛情たっぷり育てているのだから根は張っているだろう。それなのにどうして社会から引きこもることになったのだろう……やはり何らかの障害が見逃されていたのでは？という結論になるのでしょうか。

私は、引きこもる理由を『親や周囲からの期待を一心に受け、周囲に評価してもらえる自己像を発展させたものの、それは非常に脆弱性をもった(傷つきやすい)自己像になってしまった。そして社会と自分との間に壁を作り、万能的な世界に浸っている』と思っています。

植物にとって水は、人間でいう愛情に置き換えられると思っています。

私たちが一方的に水をあげ続けると根が腐ることがあるとお話しましたが、腐らないにしても植物に本来備わっている生きる力を奪ってしまうことがあります。

例えば、トマトは次第に水やりを控えてやらないと、自らが空中から水分を得ようとする力(生きる力)を成長させることができません。だから大きくなっても水をあげ続けられないといけない。

人間もそうで、本当に“こどものためになっているのか”ということ問い続けなければならないと思うのです。そしてそれは、先ほどの「対話する力」ということに結びついてくるとしています。

子育ての話で、「幼少期の愛情不足」というのはよく語られますが、どうも愛情という言葉が一人歩きをしているようにも感じています。

それは、ただ水をあげたらいいということではなく、相手を見る、こどもを見る、こどものこころを推し量る、実際に放たれた声ではなくこころの声と対話するということが非常に重要なのです。

子育ての話のみならず、最近は文脈や背景、状況を読まない時代になってきています。発言した状況や背景はさておき、言葉そのものを SNS で批判することが増えています。

「状況はさておき、放った言葉が悪い」という訳です。また子育て本も「こうしたらうまくいく!」という類の本が売れています。

しかしだからこそ、こどもと「対話」することがとても大切だと思うのです。

それは親だけではなく私たちや社会も。



この青年は20代半ばを過ぎた頃に「家を出る」と決意をしたそうです。

それには幾つかの要因が重なったと思いますが、母と子（本人）が密着する家族関係の中で、父の存在が影響したということがあります。

この家族にとって、これまでも父は家族の支えではありました。しかし、それは経済的な支えであって、心理的な支えではなかった。

父は、「自分の思いを本人に押しつけてきたのではないか、そして全てを妻に任せきりにしてきたのではないか」と面談の中で振り返っていました。

このご両親の「愛情」、それはつまり、お子さんを見て、お子さんの心を推し量り、お子さんの心の声と対話するということが、彼の自立を後押ししてくれたように思います。

この青年は強い対人緊張と被害妄想、パニック障害があり、社会に出るのは容易ではありませんでした。しかし、社会とつながるようになって友人ができ、そしてたまたま出会った女性と恋仲になり、そこからこの青年は農業を志すようになりました。

久しぶりにこの青年に会った時、「野菜を作っている時は、少し自分のことから離れられる」と話し、元気そうな様子でした。

このシリーズも今回で最後になりました。今まで沢山の方に読んでいただいたと聞きました。読んでいただいた読者の方々、またご依頼していただいた滝上町の保健福祉課の方々に心からお礼申し上げます。

（参考文献）

・諏訪真美；今日の日本社会と「ひきこもり」現象 医療福祉研究 第2号 2006

